

昭和の南海地震体験談

氏名:永井 元雄(ながい もとお)

生年月日:昭和6年3月28日

地震を体験した場所:由良町・自宅寝室

当時の家族状況:父、母、祖父、祖母、妹



1) 地震発生時の状況

当時15歳で父と漁師をしていた。自宅寝室で就寝中に揺れて目が覚めた。激しい横揺れで歩けない程だったが、とにかく外へ避難しなくてはならない、と寝たきりだった祖父を起こし、どうにか玄関まで来た時に揺れが収まった。長い時間揺れが続いた。余震が心配だったので、祖父に防寒の為にこたつを抱かせ、庭の大きなアコの木の下に一緒に避難したが、暫くすると体が冷えてきて、余震もなかったので、祖父を家の中に入れた。柱時計が4時25分で止まっていた。

2) 津波襲来時の状況

地震＝津波の話は年配の人からいつも聞いていたので、1人で海の様子を見に行った。自宅前の幅3m道路のすぐ下が船の繋ぎ場になっていて、そこから見ていた。隣のおじさんも出て来て、「こんな大きな地震揺ったら、津波あるで」と話をしていた。地震から30分程経った頃、ズーッと水位が上がってきて1m位になった時、「ゴオーツ」という音もしてきた。すぐ津波と判断し、おじさんに「(通りの)奥にひしったって(叫んであげて)くれ!」と言い、自分も叫んで走って知らせた。家族は先に山へ避難した。言い伝えでは、津波は潮が引いてから来る、と教えられていたが、潮は全然引かなかった。津波は来るとなると早かった。第1波が一番大きかった。第1波が引いた時、持ち船や網などが心配になり、父と2人で海辺に下りて来た。ちょうど網が流されていたところで、必死に掴んで木に巻きつけ、流れないようにした。薄暗かったが、防波堤まで潮が引いて、海底が見えた。湾内の防波堤は一部が引き潮に流された船により破壊され、そこから船や網が沖に流された。その後、自宅に行ったが、床板が浮いてしまっているし、家の中が何もかもひっくり返っていた。

3) 家族の行動・被害

母が祖父を連れて避難する際、歩くのが困難だった祖父が石段を上れるように、母が下から突き上げながら進んでいたら、潮に追いつかれ足が浸かった。すっかり明るくなってから家族全員で戻った。幸いにも人的被害は無く、無事だった。家の中は何もかもがひっくり返り、神様棚(床上2m程度)の高さまで濡れた跡があった。新しい仏壇が畳の上にバタンと寝た状態で倒れていて、修理が必要だった。持ち船は幸運にも山側の奥の方に流れており、すぐ見

つかり、修理も思ったより少なかった。地震の被害は無かった。

4) 集落・周囲の被害

地区で200世帯が流され16名が亡くなった。おそらく揺れが収まったので、もう一度眠ってしまい、避難が遅れ、引き潮に引き込まれたのだろう。海沿いの家屋は浸水した。50トンクラスの船が陸に上がった。防波堤の一部を破壊した船は、柏崎まで流されていた。多くの船が沖に流され、壊れたり沈んだりした。不明者を地区全体で救助、捜索したが、2名がなかなか見つからず、連日船を出して沖に出たが見つからず、1週間後に湾内の線路の下に挟まれているのを発見した。地震による被害は無し。

5) 地震・津波後の生活

泥や汚れを落とし、ひっくり返った自宅を片付ける間は、お寺近くの親戚の所でお世話になった。船を見つけ修理し、漁が再開できた時には地震から3ヶ月経っていた。だいたいその頃に元通りの生活に戻ったと思う。余震が1年程続き、揺れは何百回にもなったと思う。中には山が崩れるくらい大きなものもあった。井戸を使っていたが、潮が入ったので使えなくなった。お寺の井戸を使わせてもらい、食料は被災しなかった親戚や周りの人に助けてもらった。

6) 次の災害への備え

家を建て替えた際に、敷地の地盤を上げ、一部を鉄筋造にした。地区ごとに避難場所が決まっており、持ち出し袋は常備している。近くの造船所に大きな船が停泊中に津波が起これば、陸に上がって二次災害になる。パラペットも水を防ぐには良いが、越えて入って来た場合は抜くことができず困るのではないかと、ポンプもモーターも水に浸かれば使えないのでは、等と家族で災害の話をよくしている。井戸はいざという時に使えるように、埋めずに置いているが、地震時に海側の岩壁が割れたようで、塩水が混ざっている。

